

入選

「自分にしかできない仕事という誇り」

沖有介（テルモ株式会社 プレフィールドシリンジカンパニー）

高齢者医療、メンタルヘルスケア、成人病、救急医療、先端医療…。医療とはあらゆる領域のさまざまな疾病に対する医療従事者の努力と情熱の「挑戦」とも言える。私は小児救急医療を取り上げたテレビ番組の影響であったかもしれないが、数多くの「挑戦」の中で小児医療の重要性を感じ、そこで役に立つことができたらと志を持って、この仕事を選んだ。

私はA県で輸液・栄養関連の製品を中心とした商品の担当MRをしていた。担当商品には輸液や栄養剤の注入用ポンプも含まれていることから、在宅医療における静脈栄養法実施に携わることもあった。

在宅静脈栄養法はその多くが末期悪性腫瘍の患者さんのターミナルケアの際の利用であったが、中に短腸症候群やクローン病といった疾病により利用を余儀なくされる「小さな」患者さんもあった。私自身も何度となく、そういった患者さんたちのケアのために練習用のポンプを携えてユーザーを訪問し、医師や看護師の使用説明の補助に立ち会うことがあった。端くれながらも自分が志した「小児医療」に携わることもできたのだ。

在宅静脈栄養法において私たちが提供する情報は、担当する商品について、つまり輸液剤の薬剤情報や注入ポンプの使い方だけではない。医療従事者や患者さんの家族からは、栄養法に用いる薬剤の保管方法から使用後の容器の廃棄方法まで様々な問い合わせを受ける。その都度、患者さんの居宅の情報を確認し、患者さんが住む自治体への廃棄方法を確認することもあった。小児患者さんでは、1時間あたりの輸液量が少なく、注入ポンプが「輸液が流れていない」というアラームを発する場合があった。当然、アラームが鳴るばかりでは特に夜間の輸液において患者さんのQOLを著しく低下させる。そのために前日に会社で実際の投与状況を再現するなどして、起こりうる状況を具体的に情報提供することも少なくなかった。また、在宅では患者さんの家族に薬剤の混注を行ってもらうことが多い。院内で薬剤師など専門家が実施する場合とは違うため、配合量や配合変化について薬剤師や医師と検討しあうこともあった。診療報酬や医療経費補助に関して、ソーシャルワーカーと情報交換することもあった。このようにほんの数年前だが在宅静脈栄養法の普及はまだまだ進んでおらず、複数例の経験を持つMRは医療現場で重宝された。それはMRとし

て「自分にしかできない仕事」を実感することでもあった。

そんな中でも一番思い出に残るのは、あるクローン病のお子さんのお手伝いをしたことである。そのおさんは大学受験をするために自宅を離れて、入退院を繰り返しながら予備校に通うなど努力をしているおさんだった。担当の看護師長も「病気や治療のケアの心配より、何としても受かって欲しいっていう親のような気持ちで・・・」と語ってはばからないほどだった。私は主治医の先生の相談を受けて、入院中に退院時にも使用できるよう練習用ポンプの説明に訪問し、そのおさんと話をする機会もあった。その子を囲む先生や看護師長に比べて（？）受験の経験が比較的最近であったせいも、それについての雑談も先生方に許された。できれば世話になりたくない機械を持ち込んだ私は、その子にとって歓迎されるものではなかつただろう。それだけに注入ポンプを入れる手提げ袋に、その子が合格祈願のお守りを付けてくれたのは本当に印象的であった。

その後、看護師長からその子が大学に合格したことを教えてもらった。その子はこれからも病気とは長い付き合いをしなければならないが、そんな中でもきっと大きな生きる喜びを得たのだと思うと本当に嬉しかった。

私が小児医療を志したのは、成人とは違い小さな本人には避けることができなかった病気や怪我に挑み、治そうとする小児医療こそが究極の医療だと感じたからであった。私はMRという仕事を通して、自分の志を実現させることができた。さらにまたMRが医療の現場で欠かせないチーム医療の一員であるということを実感することができた。

国内の小児医療は昨今、その担い手不足が問題化している。しかし決してその「挑戦」を絶やしてはいけない。私もMRとしてその経験と誇りを持ってこれからも医療に貢献していきたいと思う。